
Fake ~ 偽者少女と僕の歌 ~

彼方逝哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a k e 偽者少女と僕の歌

【Nコード】

N 3 0 6 6 I

【作者名】

彼方逝哉

【あらすじ】

「僕」こと仙崎領鴉は突然何の前触れもなく平原にいた。さつきまで自分の部屋にいた筈なのに。

何も分からないまま歩いていった先には少女が立っていた。冷たい瞳で領鴉を見つめて少女が言った言葉は。

「さあ…始めましょう……」

一体ここはどこなのか。

少年の歌が始まる。

〃 0・プロローグ（前書き）

この小説はフィクションです。

実在の人物・ゲーム・団体では御座いませんであしからず。
残酷な描写・性的描写が含まれる事があります。

〓 0・プロローグ 〓

僕は平原に立っていた。

自分の部屋にいたはずなのに。

見渡す限りの平原。

鳥は空を優雅に舞い、空は澄んだ青い色。

そうか。

僕は寝ちやつたんだ。

これは夢だ！

と現実逃避を試みるもののそよよと吹く風は現実だと主張する
かのように僕の体を、頬を、髪を撫でて行く。

一人だ。

風が鳴いている。

仕方なくこれを現実と受け止めるしかない。

本当は信じたくなどないのだけれど。

本当に。

僕は歩く事に決めた。

道のない道を。

ゆっくり取り合えず歩く。

ここは何処なんだろう。

思案しながらまっすぐ歩く。

僕の名前は仙崎^{せんざき}エリア^{エリア} 領鴉。

一応高校生なのだが制服を着ていないと中学生、ズボンを穿いてい
て「僕」と言っているのに女の子と間違われる。

しかも必ず。

身長がない。（現在身長156cm。）

線が細い。（母親からは「可愛いからいいじゃない」と言われる。）
とか何とか言う理由で。

母親に可愛いからいいじゃないで済まされてしまったことがショックだったりとかする。

まあ…それは置いて。

ここに至るまでの経緯を思い出してみようと思ったのだが。

進行方向に人影が見えた。

頭に浮かんだのはとりあえずここが何処なのか聞かなきゃいけないと言うことだった。

その方向に走っていくと少女が立っていた。

物凄く冷たい瞳をした少女が。

身動き一つせず立っていた。

「あの…！」

僕はかなり必死だった。

「…。」

少女は僕から距離を取った。

しかも無言で。

…んん？

何でだ？

暫く思考が止まった。

「…敵。」

少女が呟くのが聞こえた。

何か嫌な予感がする。

少女は僕に対して身構えた俤僕を睨み見据えた。

「さあ…始めましょう…。」

少女は不敵な笑みを浮かべて僕に言った…。

〜1〜

「さあ…始めましょう……」

そう少女は言った。

いや、言ったような気がした。

その方が正しいかもしれない。

否、寧ろそうであって欲しいだけなのだ。

きつと僕は…。

目の前には少女が立っている。

ただ冷たい瞳で。

ただ完全に殺意を僕に向けて。

異常なくらいに冷たい表情で。

現在進行形で真正面に立っている。

目と目が合う。

さあ始めましようと言われても僕には武器も何もない。

とりあえず彼女を観察する。

見た感じまだ中学生位に見える。

身長が同じくらい。

少し悔しいのは彼女のほうがちょっとだけ高いことだって事は内緒だ。

体型と言うか体つきも未だ発育途中のようだ。

顔つきはなんと言うか例えるなら人形。

綺麗に整った顔をしている。

着ている服はゴスロリだった。

髪の毛は銀髪でツインテール。

下ろせば多分背中が隠れるくらいだと思う。

瞳は黒くて釣り目。

なんて言うかお嬢様っていうイメージだ。

怪訝な顔をして彼女は僕を見る。

まるでありえないとでも言いたげに。

彼女は僕を見据えた。

暫く様子を窺うようにジッと見据えている

「…何もしないの……？」

「だって無理だし。」

「武器もない？」

「持ってたならこんな身軽な格好して無いだろう？」

「…確かにそうね。」

彼女は未だ警戒しているようだったが構えているのも馬鹿馬鹿しくなったようだ。

警戒は解いていないけれど武器を仕舞った。

彼女は僕に近寄ってきた。

じつくりと品定めするように彼女は僕を見ている。

「貴方…名前は？」

「仙崎領鴉」

「エリアか……」

「君は？」

彼女は一瞬迷ったように目を逸らす。

そして言うことを決めたらしい。

「私は…フェイクス。フェイクス＝ライター。」

にこりと笑う彼女を見て外人だったのかと苦笑する。

「偽造の嘘つき。そう呼ぶ人もいるわ。」

彼女はどうかやら警戒を解いたようだった。

僕の近くに座る。

僕も彼女に合わせて座る。

「私はね…偽者なのよ。この身体が持っていた魂ではないの。」

「どう言う事？」

「私は肉体がないの。この身体は死んでしまった女の子から貰ったの」

彼女は語り出した。

簡単に言うところらしい。

彼女は何処かの機密機関で造られた「モノ」だったらしい。

ある実験で彼女は「モノ」から「人間」に作り変えられたのだそう
だ。

使った器は名前も知らない少女だった。

只の抜け殻の少女だった。

彼女は少女に偽造されて。

彼女は『名前も知らない少女』になった。

彼女は『名前も知らない少女』にされてしまった。

最初に彼女がやった事は『名前も知らない少女』の存在を知ってい
る人間（者）を抹消^{デリート}する事だった。

「まずはその子の家族。食事に睡眠薬を混ぜて眠らせてから目隠し
をして物置にあつた鉈で首を切つて両親を同じ場所に送つてあげた
の。その後身体をバラバラに切断したわ。勿論弟とか妹も同じよう
に抹消してあげたの。この子が可哀想でしょう？実験によつて殺さ
れたんだから。同じ場所に逝かせて上げた方が良いでしょう。それ
からその子の友達。殺しはしなかったけれど、精神的に甚振つて（
いたぶつて）あげただけ。簡単に気が触れちゃつて。今は精神病院
で生活してるわ。多分自殺したと思うけれど。最後にその子の彼氏
結構いい男だったんだけどね。最後の思い出に抱かせてあげたの。
彼が果てた後飲み物に睡眠薬を入れて眠らせた後に首を締めて彼女
のところへ送つてあげたの。」

その後は教えないとでも言いたそうに彼女は微笑んだ。

躊躇わなかったのだろうか。

頭を過つた。

「その身体は食べたわよ？」

クスクスと楽しげに彼女は笑った。

「余す所無く臓器一つ残さず。全部食べたわ。血の一滴まで残さず。
私の身体になつたわ。生のままで新鮮なうちにね。今でも覚えてる

わ。あの血の匂い。全て。だからといつてもうあんなことはしたくないけれど。それに普通の食べ物のほうが美味しいし。あの時の私は餓えてたし。ああ。ごめんなさいね？こんな話気持悪いだけよね。とりあえずそのときから。私はフェイクスを名乗った。それ故に私は偽造された嘘つきなのよ。」

彼女は静かに髪を掻き揚げて空を見る。

まるで世間話をするように話をして。

何もなかったように。

髪を掻き揚げて。

晴れた空を見上げる。

「つまらない話をしたわね。」

「い…いや。知りたかったから。」

彼女は静かに笑みを浮かべた。

その笑顔は自嘲しているかのようだった。

哀しいような悲しいような笑顔だった。

「…エリアは何処から来たの？」

いきなり聞かれて戸惑う。

気付いたらいきなり居ましたなんて言った所で多分信じてもらえないだろう。

「僕は…」

解らない。

どう説明すればいいのかわからない。

確か僕は説明書を読みながらパソコンの前に座っていたはずだ。

それからパソコンを機動させてゲームのディスクを入れてゲームをはじめようとしたところまでは覚えてる。

そこまでの記憶しかない。

「話したくないのなら無理には聞かないわ。」

誤解を与えてしまったようだ。

「話したくないわけじゃないんだ。ただ此処じゃ話せない。もしかしたら…僕は異次元空間から飛ばされたのかもしれない。」

確証は無かったけれど。

彼女に聞かれても頭の整理がついていない。

とりあえず此処は何処なのか知りたい。

彼女はそうと呟くと眉間に皺を寄せて何かを考えているようだった。

「宿に着いたら話してくれればいいわ。」

彼女は人懐っこい微笑を僕に向けた。

もう警戒はしていないようだ。

「うん」

頷くと彼女は少し考え立ち上がった。

「エリア。今すぐ此処から離れましょう。」

彼女はにこりと笑うと僕を立ち上がらせて歩かせる。

理由を聞く間もなく歩き始める。

暫く歩いてから速度を緩めて彼女の速度に合わせながら歩き聞く。

「もしも本当にエリアが異次元の人間だったら狙われるわ。その血肉を食べれば異次元に行くことが出来るとか、その体に触れれば厄が落ちるとか色々言われているからね。物騒じゃない。エリアには少し戦闘力が必要みたいだし。」

彼女は僕を見て微笑み言う。

「自分の身を最低守る事が出来るくらいにはなって頂戴。と言う訳で暫くは私と一緒に行動してもらいます。」

フフッと彼女は笑った。

確かに彼女の話聞く限り物騒だ。

出来る事なら死にたくは無いし、そうじゃなくても願ひ下げだ。

それから暫く僕たちは何処に向かうわけでもなく無言で歩いた。

木々がざわめく音。鳥の囀る声。

それを聞きながら只歩く。

「異次元ってどんな感じなのかしら。凄く興味深いわ。聞きたいことが沢山あるの。ああ…でもその前に装備とか買わなくちゃね。」

彼女は微笑して僕を見た。

周りを見ると街に近いようだ。

「あの… 僕お金ないんですけど。」

彼女は僕を見て微笑む。

「私が買ってあげるわよ。エリアの面倒くらいなら見てあげられるわ。」

とケラケラと楽しそうに笑う。

そして僕にウインクをしてこう言った。

「対価は… 貴方の世界の事を話して聞かせてくれればいいわ。」
安い対価だ。

街に着くと彼女は街の名前を僕に教えてくれた。

それのお蔭で此処が何処なのか漸くはつきりしたのだ。

「此処はアスタリスクって名前の街よ。結構色々と店とか充実してるの。冒険者がはじめて来る街よ。ああ。それから偽名を使ったほうがいいわね。バレたらアウトだろうから。」

彼女の話聞きながら思い出したのはさっきまで読んでいた説明書だった。

確かそのゲームの名前… F a k e とか書いてあった。

確か街の名前。

アスタリスクだった。

確定した。

僕はどうやらゲームの世界に引きずり込まれたらしい。

F a k e の世界だ。

って言うことは彼女が最初の仲間のようなのだ。

「… 僕此処知ってる…。」

彼女は僕を見て驚いたらしい。

「何で？」

「異次元のゲームで F a k e って言うのがあってそれと世界が一致したんだ。何なら世界年表言ってやろうか？」

多分覚えてるはずだ。

記憶力はそこそ良いほうなのだ。

彼女は立ち止まる。

見た感じ洋服屋のようだ。

「異次元の…ゲーム？ゲームってなあに？」
と興味が湧いたらしい。

「知りたいけれど後でにしましょう。」

とその洋服屋に入って行く。

僕も後からついて入った。

店に入ると水色のミディアムショートの男が出迎えてくれた。
「いらつしゃいま・・・なんだよ。フェイじゃねーか…。」

「何だよとは随分なご挨拶じゃない。マックス。」

「今日の用は？」

「この子の服を選びに来たの。」

と僕をチラリと見ながら彼女は言った。

「へー…」

彼は僕を見るとにこりと笑いながら話し掛けてきた。

「俺此処の店長のマックス」シユリエ。マックスで良い。君の名前は？」

「エリア。」

彼女に呼ばれている名前で通す事にした。
フルネームは偽名だけど。

「エリア」アクセス。エリアでいいです。」

あまり喋らない方向で行こうと思う。
ぼろが出てもまずい。

「エリアか。良い名前だね。」

と微笑まれた。

「まあ…フェイと言う関係かは聞かないけれど。仲良くしてやつてね。」

「うん。」

頷くと彼は仕事に戻っていった。

「エリア。こつち。」

「あ…うん。」

彼女に呼ばれその方向に行くとフィッティングルームだった。

「今から何着か服を着てもらいます。」

手に持っている服を見ると僕はたじろいだ。

「ちょ…フェイクス…僕はおと…」

男ですと言おうとした瞬間口を塞がれた。

そうだった。

声を潜めて抗議する。

「僕は男ですよ？これ女物じゃないですか！」

「ええ。女物の服よ？貴方には女の子の振りをしてもらっわ。言い張れば見えなくも無いし。」

彼女は声を潜めてそう言うのにこつと笑う。

本気で落ち込みそうだ。

母親にも同じこと言われたけれど。

同じこと言われるとは思ってなかった。

「それ以外にも理由があるんだけど。それは後で話すから。」
「そういわれると我慢するしかないようだ。」

「解りました。着ます。」

彼女は微笑んだ。

彼女は微笑みながら僕に服を渡す。

「まずはこれを着てみて頂戴。」

渡されたのは白いワンピース。
仕方なく着る事にした。

僕は白いワンピースを片手にフィッティングルームの個室に居る。

「…はあ…」

自分の身長が無さを恨みたい。

覚悟は決めたもののいざ着ようと思うと躊躇う…。

「エリア。まだ？」

ああ…神様の意地悪！！

兎に角着るしかない。

着たら着たでシヨックがでかい。

鏡を見るんじゃないかったと後悔した。

それなりに女の子に見えてしまう自分がいやだ。

「開けるわよ？」

まあ…開けた瞬間の僕の表情を見て彼女はドアを閉めた。

相当落胆した顔をしていたのだろう。

彼女は気を取り直してドアを開けた。

そして僕を見た。

「…なんか…ごめんなさい。」

謝られた。

「いえ…」

「やっぱり思ったとおりだったわ。次は此れを着て頂戴」

渡されたのはゴスロリ。

着方が解るわけがない。

「御免…着方がわからない」

正直困ったと言うか…なんと言うかである。

凄く良い笑顔で彼女は僕を見た。

「私が着せてあげるわ」

言くと彼女は僕の服を脱がせ - 僕からすれば脱がされたと言つべきかも知れない - 僕にゴスロリを着せた。

「…うん。悪くは無いわね。我ながら優といった所かしらね。」
とにこりと笑った…。

見目麗しいといえはそうなのかもしれないけど。
落ち込む。

彼女を見ると服を選んでいるようだ。

まだ買うつもりらしい。

『女の子の買い物は時間がかかる。』

誰かが言ったとおりだ。

疲労が既に身体にきている。

洋服を着なおして僕はフィッティングルームから出る。

本当にこうも女装が似合ってしまうと言うのがショックで立ち直れ
そうも無い。

「大変だねえ…」

横を見ると彼が立っていた。

「マックス。仕事は？」

「一応一段落させてきた。フェイは？」

「あそこ」

僕は指を指す。

彼女は手に5着以上持っていた。

彼は苦笑を浮かべる。

「ああなったら大変だな。あの程度ならまだ大丈夫だけど…前はも
っと酷かったんだから。それこそ店ごと買い取るんじゃないかって
ぐらい買ってたこともあったんだからね。」

「はあ…」

彼女を見ると何かを迷っているらしかった。

女の子はよく解らない。

服にこだわる必要があるのかと思う。

別に動きやすい格好でもいいじゃないか。

それに着ない服だって有るだろうに。

溜め息が出る。

「にしても…可愛い顔してるよね？エリアちゃん。」

「は？誰が？」

「エリアちゃんが。俺好み。」

ちょ…ちよつとマテ何？！

コイツ何いつてんの？！

しかも笑顔で！！

「無理」

「無理って言われてもな！。俺的にストライクゾーンなのにな！。何この状況。」

つていうか迫るな！！

「距離近い」

「うん。わざとそうしてるの。」

わざとかよ！！

しかも顔の距離近いから！！

キスされそうになった瞬間彼女が後ろから彼の頭を殴った。

「やばい気がしたから戻ってきてみたら…このど変態！！私のエリアに何してんのよ！！このエロ店長！！」

キツと彼を睨む彼女の目は…マジだった。

そして彼と僕に聞こえるように言う。

「エリアは男の子！女の子じゃないわ！このロリコン！」

「ロリコンじゃねえ！って言うか俺男の子でも全然OKだから！寧ろ何時からフェイの物になったんだよ！」

「今よ！今！とりあえず今回は此れだけにしておくから。とっとと会計しなさい。この変態！」

舌打ちをしながら彼は僕から離れて会計を始めた。

助かった…。

「エリア…次から私の傍にいなさい。」

「うん。」

「でもなんで？」

「マックスは知る必要は無いわ」

「情報要らないんならそういう態度でもいいけどね？」

「……！！卑怯よ？」

「取引だよ。」

グツと黙り彼に今までの経緯を話した。

彼は納得したらしい。

にこりと笑うと彼は僕を見た。

「了解した。」

「そのワンピースは着ていくからいいわ。」

ワンピースだけ手渡された。

着替えて来いと言うことなのだろう。

フィッティングルームに入って着替えをしている間に会計を済ませたらしい。

出ると彼女は近くに立っていた。

「後はメイクとウィッグつければ完璧ね。」

とりあえずメイクされ僕はまた落ち込むことになる。

完全に女の子だ。

違う事無き女の子。

自分だと言うことにショックを隠せなかった。

「じゃあ行きましょうか。エリア。」

「……うん……」

「そんな落ち込むなって。エリアちゃん可愛いよ。」

「口説くな！この変態野郎！」

そして僕達は店から出た。

憂鬱でたまらない。

こんな格好で街中を歩かなきゃいけないなんて……。

「はあ……なんでこんな事に……」

「そう言わないでよ。後で宿についたら理由を話すから。」

……僕はこのままでいいのでしょうか……。

憂鬱でたまらない。

こんな格好で街中を歩かなきゃいけないなんて…。

「はあ…なんでこんな事に…」

「そう言わないでよ。後で宿についたら理由を話すから。」

こう言われて歩き出して30分ぐらいだった。

歩いている間場所の案内を彼女はしてくれていた。

それを聞きながら僕は歩いているわけなのだが。

「ねえ。ちゃんと聴いてる？」

彼女が立ち止まったのに気付かず彼女とぶつかりそうになった。

彼女は僕の事をじつと見る。

決して彼女の身長が高いわけではない。

僕の身長が彼女と同じくらいなのだ。

何度も言うが僕の身長は156cm。

高校生男子としては低いといえる。

寧ろ低すぎる！！

それ故に僕は女の子や中学生に間違われるわけで。

ある意味屈辱である。

「…御免…聴いてなかった…」

「全く…ちゃんと聴いててよね？重要な事なんだから。」

確かに重要な事なのだ。

買出しを頼まれた時に行けなくては意味が無い。

彼女は溜息をつき再び最初から説明を始める。

「彼処は酒場。情報とか仕事の依頼とかが貰えるわ。」

その方向を彼女は指差しながら言う。

「その手前にある酒場の前の建物は防具屋。防具を買ったり売ったりできるの。」

その方向を指差す。

「で、防具屋の隣は武器屋。武器を売ることや買うことができるわ。それから酒場の隣は合成屋。武器とか防具を合成したり、強化したりする事ができるの。」

と彼女の指差す方向を僕は目で追う。

その都度簡単に内容を説明してくれる。

「それから此処がアクセサリー屋。」

と僕の真後ろにある建物を指差した。

「此処ではアクセサリーを買ったり、売ったり作ったりする事ができるわ。中には魔法が使えるアクセサリーもあるらしいわ。」

と彼女は微笑んだ。

そのうちプレゼントしてあげようと思った。

下心は無い。

一応言っておく。

「そうそう。忘れてたけど…この世界の通貨単位はM。^{メルト}確か前に誰かから聞いたんだけど…1M=1円って言う感覚でいいわ。」

と彼女は言った。

どうやら彼女は解りやすく説明しようと努力してくれたらしい。

お蔭で何となく感覚は掴む事が出来た。

にこつと彼女は笑うと説明を再開する。

「アクセサリー屋の正面、私の後ろにあるのが預かり屋。簡単に言うと武器とか防具を預ける事ができる銀行みたいなものよ。引き取りは何処でもできるから大丈夫。預けておくと武器とか防具のレベルアップができるみたい。最後にちよつと歩くと宿屋があるわ。今日は其処に泊まるから。宿屋の正面に銀行があるわ。銀行は説明要らないわよね?」

と彼女は説明をしめた。

「解った?」

心配そうに彼女は僕を見る。

「大丈夫。解った。」

彼女は安堵したようだ。

そして彼女は僕を見る。

「ウィッグは…要らなさそうね。女の子に見えるし。」
さらに彼女は言った。

そして足元を見彼女は考える。

「靴はパンプスカブーツ。私が穿かなくなった奴があるからそれで良いわ。下着は…その…自分で買って来て…。場所は教えるから。」
恥ずかしそうに彼女は視線を逸らした。

いや…下着は自分でやらせてください。

僕が恥ずかしいです。

頷くと彼女は微笑んだ。

こんな話をしている間に宿屋の前に僕らはついた。
中に入るとすぐに部屋に案内された。

部屋は広くもなく狭くもない綺麗な部屋だった。

彼女の部屋はどうやら隣のようだ。

部屋の中を確認してから彼女の部屋に向かった。

彼女の部屋を開けるとどうやら部屋着に着替えたらしかった。

ゴスロリからトレーナーにハーフパンツにレギンスと言う出で立ちだ。

その格好でベッドに座っていた。

「さっき話そうと思ってたんだけど…言葉のこと。私・僕だったらどっちでもいいわ。僕にするんだったら男の子言葉でも構わないわ。私の場合は私の喋り方を真似すればいいわ。」

と彼女は言った。

「解った。」

と僕は頷いた。

「で…僕は何で女装しなくちゃいけないんですか？」

彼女に聞く。

彼女は少し眉間に皺を寄せて考えてから話し出した。

「最初に言った理由以外にもう一つ加えるなら…思い込ませるため。」

彼女は苦笑を漏らした。

「女の子だから戦闘力が無いと思わせるためって言った方が良いのかしら。戦闘の技術は身体で覚えるしかないから。だからそれならハンをデをもらえる女の子の方が有利だし。そう言う理由。」

彼女は僕を見る。

僕は理由を理解した。

「だから。敵の目を欺く為に女装って言う方法を選んだのよ。」

と彼女は言った。

「聞いてもいいかしら？さっきの答。」

彼女はにこりと笑った。

何処からきたのか。

そう問われた。

「僕は……」

ゆっくりと思い出しながら僕は語る。

「学校の友達にゲームを貰ったんです。面白いからやってみるって・・僕は家に帰って自分の部屋のパソコンの前に説明書を読みながら座ったんです。一通り読み終わってゲームのディスクをパソコンの中に入れてパソコンを起動させてゲームをはじめたところまでは覚えています。其処から記憶が無くて。気付いたらあの平原に立っていました。」

取り合えず僕の覚えていることを話す。

彼女は聞き終わると頷いた。

「パソコン？学校？ゲーム？ゲームはさっきも聞こうと思ってただけれど。へー……でも判断が此れで確定したわ。異次元から飛ばされてきた人間だって言うことが理解できたわ。」

と彼女は微笑んだ。

彼女に聞くとパソコンと言うものは存在しないらしい。

ただし携帯は存在するのだと言う。

色々と話していくとどうやら異次元にかなり興味があるらしい。

好奇心旺盛なのだろう。

「そうだ。マックスの店には一人で行かない事。襲われて変な事されたらいやだから。」
にこつと笑った。

そして僕は下着を買いに行く事にした。
流石に女の子の格好で下着屋には入りたくない。
一応男物の下着を買わなくてはいけないからだ。
僕は着替えて外に出る。

言われたとおりに道を歩く。

「エリアちゃん」

後ろから声を掛けられて驚いた。

振り返ると彼が立っていた。

「…何か？」

かなり仏頂面かもしれない。

彼は微笑んだ。

「そんな顔すんなよ。可愛いけど。」

と彼は何かに気付いたように少し表情を曇らせた。

「買い物？」

「そうですね？何か？」

ひそひそと彼は僕と話すと二人で歩く事にした。

僕は気付かなかったけど付けられているらしい。

「下着屋か…？したら奴らに気付かれないように芝居できるか？」

「僕にどうしろって言うんですか。」

「一緒に下着選んで欲しいんだけど？」

普通の声のトーンに戻し彼は言う。

「何で?!」

彼に言われたとおりにする必要があるようだ。

「嫌…？」

「いやじゃないですけど…その…解りました。今回だけですからね？」

と答えると彼は嬉しそうに微笑んだ。

そしていきなり抱き寄せて唇を塞いだ。

「…?!」

チュツと音を立てて離れる。

「いつものことだろ？」

と彼は言う。

彼らは撤退していくようだ。

この瞬間僕は本気で悔しかった。

彼は170cmくらい。

未だ成長期。

伸びてくれ。

僕の身長。

神にも縋りたい。

寧ろ今この場でこの男を殴っても許されるはずだ。

怒りを含んだ目で彼を見る。

彼は気付いていないようだ。

ヘッドバットを喰らわせてもいいかもしれない。

こんな黒い事を考えながら彼を見る。

「その…悪かった。キスしたことは謝る。」

案外いい奴だった。

黒い事を考えた事を反省する。

次のセリフで反省した事を悔やんだけど。

「それっぽく見えたみたいだし結果オーライじゃん？」

いやいや。

そう言う問題じゃないだろう。

とりあえず店を見つけた。

二人で入り彼に選んでもらった。

初めて他人に下着を選ばせてしまった。

この後何が起こるのか知っていたなら僕も彼も恐怖と向き合う事はなかっただろうと思う。

買い物が終わり店から出ると叫び声が聞こえた。

その方向を見ると男が立っていた。

片手で男の首を掴み持ち上げているのが見える。

捕まれているほうの男は首から血液を流していた。

血液は男の白い手を伝い地面に落ちていた。

「っ…は…なせえ…」

捕まれているほうの男は掠れた声を出しながらこう訴えじたばたともがく。

「俺が…そう言われて離すと思いますか？浅はかですね。」

にこりと掴んでいる男は天使のような微笑を浮かべクスクスと笑いながら手に力を入れ喉を潰したようだ。

そして声も出せなくなった男を見彼は冷笑を浮かべて見る。

紫色の瞳で。

未だ男からは血が溢れていた。

そして。

「死んでくださいね。」

男はニヤリと笑い冷たい瞳を向けて男の頭を踏む。

何処にそんな力があるのだろうと思うほどの勢いで男の頭は潰れた。骨が砕けて頭が潰れて血が飛び散り脳が頭から飛び出し眼球が飛び出す。

にこりと笑うと少し困ったような顔をしながら手についた血を舐める。

「またやってしまいました。…俺の悪い癖ですねえ。直さなくては

…」

そして男は死体を担ぎ上げると呟く。

「まあ…主の食事にはいいかもしれませんし。持って帰りますか…」
そして周りを見る。

此方に視線が向けられる。

目が合ってしまった。

「見られてしまったようですねぇ…。」

考えているようだ。

男は仕方ありませんねえ…と呟くと死体を置く。

どうやら目をつけられたようです。

「…死んで貰いますよ?」

男は笑って僕らに近付いてきた。

な…なんて言うか…ピンチです。

「…死んで貰いますよ？」

男は笑って僕らに近付いてきた。

ピンチ過ぎるだろう…これは。

「まさか…嘘…だろ…？？」

彼はそう呆然としながら呟くと首を振って構えを取る。

応戦するつもりらしい。

その目はあのオチャラケたような感じの人間とは思えないような。

さっきまで僕をナンパしていた男とは違う。

そんな空気だった。

にこつと笑うと男の瞳の色が変わる。

紫色の瞳から…琥珀色の瞳に…。

その笑顔からは想像できない。

さっき僕たちの目の前で人を殺した人間には見えない。

彼は緩く笑う。

至極楽しそうに。

狂気に満ちた顔で。

猟奇殺人でもこの人はこの顔を保ち続けるんだろうな。

そんなことを思いながら。

「エリア！下がれ！」

その声が届いているのに下がれなかった。

くすぐすと笑う声がすぐ近くで聞こえた。

はっとなり僕は横を見る。

くんと匂いを嗅がれる。

「女性…ですね。」

この男は何を思ったのかそういつて離れる。

男だ！

と叫べたならどんなによかったか。

ひとまず女物の香水やらさっきのメイクの匂いがまだ残っていたの
だろう。

女装をしていてよかった。

本気でそう思った一瞬だった。

「女性と子供には手が出せないのね。」

とくくつと喉の奥で笑う。

それも怪しげに。

何かをされると思っていた僕は力が抜けてしまった。

怪しげに笑った男を見て。

何かをされると思っていた僕は力が抜けてしまった。

「お前…生きてたのか…？」

彼はこの僕の真正面に立っている男に問う。

男は至極楽しそうに喉の奥で笑い彼を見てまた僕を見る。

「生きていた…のではないですよ。もちろん俺は一度死にましたよ。ですが。」

ですがと彼は少し思考し。

なんともいえない表情を浮かべて。

「『ある方』が俺を蘇らせた…とでも言うべきでしょうかね。」

男は笑う。

その笑いは自嘲しているような。

なんともいえない笑い顔。

「その方のため。俺はここにこうしているのですよ。」

にこつと男は笑う。

先程までの表情はいつの間にか消えていた。

琥珀色の瞳は細められ。

僕と彼を見る。

「フエイ…さんは？お元気ですか？」

あの子を知っているらしい。

違和感を覚える。

その態度は余所余所しい。

「元気だよ。…お前には逢いたくないだろうが…。」

「俺は死んだ人間ですから。こちらから逢うこともないでしょう…。」

「

この会話を聞く限りどうやらこの三人は元はチームだったのだろう。あくまで僕の憶測だが。

「彼女は？」

話題はいつの間にか僕のことに移ったようだ。

「フェイが拾ってきた子だよ。」

「エリア」アクセスといいます。」

自己紹介は自力ですて見る。

「はじめまして。クレイ」ルカイルと申します。」

はじめましてというにはもう大分経ってるわけなのだが。

琥珀色の瞳を細めて微笑むと男はさりげなく彼を見て言う。

「マックスに何もされていませんか？何かされたら大声で叫べばたぶんフェイさんがすぐ来ると思いますよ？」

「は…はあ…。」

どうやら女癖が悪いらしい。

女癖というか…セクハラ魔らしいことはもうすでに実証されているわけ。

冷やかな目で僕は彼を見る。

「う…わあ…なんてひどえこと言いやる！」

「ですが本当のことでしょう。女癖が悪い事。」

クレイと名乗った男はくすくす笑い彼を見る。

「ほかの女にも私にしたことしてたんだ…。へーえ…。」

良い笑顔で言ってる。

「ち…違いよ！！あれはエリアちゃんだけだって！！」

慌てふためいたように彼は言う。

ヤバイ…マジで面白い。

くすくす笑うとどうやら遊ばれたことに気がついたらしい。

「ったく…大人で遊ぶな。」

彼は頭をかき少し困ったように言い。

「ああ…そろそろ帰らねばなりません…。」

死体を放り出したままだったことに気がつきクレイはそちらに歩いていく。

「失礼。」

ふと笑うと再びクレイの瞳は紫に代わり。

背中には翼―悪魔がつけているあれだ。―が生えて飛び去った。

その姿を僕と彼は見送るしかできず。

「さあ…帰ろうか。」

「聞きたいことがあるんだけど。」

「何だよ。」

「あの人…クレイさんだったか。彼とフェイとマックスの関係は？」

「…昔の仲間だよ。」

「ふーん…」

彼は少し言いくそな顔で。

それだけ言って歩き出す。

その後姿を追いかける形で。

僕は追いつくために軽く早足になって歩いた。

ふと立ち止まると彼はにっつと笑う。

「何？」

「デートみたいだなと思っただけ。」

「変態発言はやめろ。」

「はいはい。わかってますよ。」

デートといわれれば・・・傍から見ればそう見えるであろう。

女の子に見える容姿の子と男だ。

実際は男同士なのだが。

いつそもう男ですと公言したい衝動に駆られるが。

こいつは知っているがゆえにさらにたちが悪い気がする。

この生活に慣れるまではどうやら時間がかかりそうな予感がある。
むしろ慣れたくはないなとも。

このときの僕は思っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3066i/>

Fake ~ 偽者少女と僕の歌 ~

2010年12月3日21時42分発行